

再びフルトン駅で切符を買う。えっ！日本語？

ここの駅の券売機は、日本語表示が選択できるのである。グランドセントラル駅には、中国語と韓国語しかなかったのに……。ガイドさんに聞いてみると、それぞれの駅の利用状況に応じて、日本語表示のある駅とない駅があるとのこと。フルトン駅は、ワールド・トレード・センターに近く、日本の企業や観光客が多いことから配慮されたらしい。見知らぬ土地で日本語を見ると、何かホッする。



日本語が選択できます



地下鉄の券売機

＜ニューヨークの子育て支援事業について＞

14 時、ニューヨーク市保健精神衛生局訪問。

デイケア部副局長 フランク・クレシウロ氏

保健部集団保育課長 ルビー・リチャードソン氏

ニューヨークの子育て支援事業において一番重要な保育所事業については、ニューヨーク市で約 1 万カ所設置されている（大きく分けて、ファミリーベースとチャイルドケアに分類される）が、いずれも小学校入学前の 6 才以下の子どもが対象となる。

ファミリーベースは約 8,000 カ所設置されており、アパート等で子どもを預かるタイプで大体 6 人～12 人のユニットで構成されている。

これは、ニューヨーク州のプログラムで州の予算で運用されている。指導者は高校卒業以上



で、2年ごとに30時間の訓練を受けることが条件となっているが、指導者の能力としては決して高いとは言えない。

設置箇所も多く、根本的に州のプログラムとして運用されているので、人材確保の面からも厳しくしていない。

チャイルドケアについては、市の法律に基づいて設置されており、現在、約2,000カ所が運営されている。ただ、市が公営施設として運営しているのは350カ所で、残りの1,650カ所については市の許可を受けた私営の施設である。

公営施設の場合、保育料負担はあるものの施設維持費等は市が全額負担して設置されており、NPO法人が運営している。私営施設の場合、施設維持費等結果的に保護者が全額負担することとなるが、中には企業の社内託児所として運営されているものもあり、ファイザー製薬やシティーグループ等、現在、34社が社内託児所として登録している。多くの私営施設が店舗を借上げたり、空きオフィスなど主に商業施設を利用している。子ども1人あたりのスペースやカリキュラムなど一定の条件を満たしていれば許可される。指導者については、前述のファミリーベースよりも高い能力が求められる。日本の教員免許に相当するスタディプランを取得していることが条件となっており、就学前の子どもに対して適切な指導のできる人でないと従事することができない。

市の法律では、就学前の子どもの保育環境として、数字の遊び、音楽、お絵かき、給食、健康診断、予防接種、1日1時間の運動や2才以下にはテレビを見せてはいけない等のカリキュラムが決められており、基本的な幼児教育期間として位置づけられている。また、指導者をはじめとするスタッフの前科・前歴をすべてチェックしたうえで、指紋の提出も義務付けられている。

つまり、州の規定よりも、保母さんの資格やスペース、スタッフの比率などが細かく市の法律によって規定されており、施設内における教育水準も求められているのが特徴である。

施設の規模としては、ファミリーベースよりも大きく、最低25人から最高200人まで施設のスペース等によって定員が決められる。

平均的な産休期間が3カ月の会社が多いため普通は生後3カ月から預かるが、中には生後6週間から預かる施設もある。年齢別に指導員の数も定められており、例えば0才児の場合は、1人のスタッフで4人の赤ちゃんとなっているが、5才児の場合は1人のスタッフで15人となっている。多くの施設は午前7時から午後7時ごろまでだが、中には午後5時から翌朝8時までのナイトプログラムを実施している施設もある。

ニューヨークでも施設に入れない待機児童は存在する。多くは親戚や友人に見てもらっているが、中にはベビーシッターを雇用している人もいる。

市の法律では、4人以上を預かる施設については届けなければならないが、3人以下のユニットであれば、市の届け出対象外となり、現在約3万人の子どもたちがこの種の施設に入っているとおもわれる。届け出がないので推定でしかわからないとのこと。



<児童虐待について>

ニューヨークでも児童虐待はある。

虐待に関しては、保育事業とは別に市の別のセクションが担当しており、24時間体制のプログラムで運営されている。虐待の児童の入所に関しては、通常のチャイルドケアのカリキュラムとは別に運用される。

もし虐待が通報されれば、市の特別調査チームが調査に入る。チャイルドケア内で虐待が行われていれば、その施設だけでなく、管理している市保健精神衛生局も調査を受けることとなる。

また、家庭で虐待を受けているような状態を発見した場合は、速やかにチャイルドケアの施設責任者から市に報告しなければならない。どのような対応がよいのか、市の調査チームの指示を受けて子どもの保護に関する協議を行う。

実際にチャイルドケアの施設見学を申し出たが、保育中の見学はできないとのこと、子どもが退所した後の施設見学を午後6時30分からさせていただくよう手配願った。

(※ブライト・ホライズン保育所については後述)

<大統領選・予備選挙投票所視察>

16時30分、アメリカ国務省広報局担当官 グレゴリー・ケイ氏の特別の取り計らいで、ニューヨーク第158パブリックスクールで行われている予備選挙の投票所を視

察させていただく。



街のあちこちに投票所の案内ポスターが…



第 158 パブリックスクールの入り口

この小学校では、民主、共和両党の予備選挙が同じフロアで行われており、両党合わせて約 700 人の投票が行われる。予備選の投票所となったこの小学校は、今日 1 日臨時休校となっている。会場内に入ると、まず、民主、共和それぞれの受付で自らが登録者であることを確認してもらった上で、地区別の投票カウンターに進む。ここで改めて名前を確認してもらって、民主、共和どちらかの投票用紙を受け取り、黒い布で覆われた B O X 内において投票する。



投票所の中の様子



うしろの黒い B O X で投票します

この会場では、旧式のパンチ式投票機が使われており、自分の投票したい候補者のネームプレートのところに投票用紙を挟んでレバーを引くと投票用紙にパンチ穴があげられて、そのまま投票用紙が回収される仕組みとなっている。日本のように記名するのではないので、なかなか上手に表現することはできないが、誰に投票したかわからないようになっている。同



じ予備選でも州によっては、党員集会を開き、誰を支持するのか表明する方法の予備選のやり方もある。

また、獲得票数に応じて代議員の持ち票を按分する州もあれば、最多得票を得た候補者にすべての持ち票を獲得させる総取り方式を導入している州もあり、候補者の選挙戦術に大きな影響を与えている。ちなみにニューヨーク州は、民主、共和両党とも按分方式である。

今回たまたま、スーパーチューズデーのタイミングでニューヨークを訪問し、国務省の配慮で投票所の中まで入ることができたことは、一政治家として貴重な経験であった。



ここに投票用紙をはさんでパンチを入れます

17 時 30 分、ニューヨーク外国人特派員センター訪問。グレゴリー・ケイ氏の案内で自らが広報担当官として従事する外国人特派員センターを訪問。



各国の特派員

ここでは、ニューヨークに支局をもつ各国の新聞・通信・放送等各メディアの特派員に対し、アメリカ国務省が様々な情報提供を行う所。わかりやすく言えば、国務省のニューヨーク記者クラブ。

この日はスーパーチューズデーということで、私たちが訪ねた夕刻の時間帯は、各国の特派員が投票の状況等を確認するため、頻繁に出入りしていた。また、記者会見場となっているホールではワシントンとの回線もつながって、3大ネットワークをはじめ各国のテレビ局などがすぐに特派員レポートを送出できるよう準備が進められていた。ただ、残念だったのは、全米の時差の関係から西海岸の状況が判明するのは、ニューヨーク時間の深夜から未明になるとのことで、今夜遅くにならないとバタバタと動き出さないということでした。



この映像はワシントンに映っています



グレゴリー・ケイ氏を囲んで

<保育施設視察>

18 時 30 分、ニューヨークの中心街、ロックフェラープラザの地下1階にあるブライト・ホライズン保育所を視察する。

ここでは現在、生後6週間～6才までの乳幼児 80 人を預かっており、すべての児童が引き取られるのを待ってジェニー・マンゲル所長の案内で施設内を視察させていただく。

中はかなり広く、100坪くらいはあると思われる。年齢別に部屋が仕切られており、1人の指導員が責任をもって子どもたちを管理できるようになっている。

また、午後にレクチャーを受けたとおり、様々な年齢別のカリキュラムに応じた遊具や教材が配置されており、子どもたちが自然に学習できる環境で保育が行われていることを実感する。高年齢クラスでは、トイレの使用も自分でできるように配置されており、様々な生活習慣も体得できるよう工夫されている。

ただ、ビルの地下のオフィスを改造して開設された施設だけに、園庭のようなオープンスペースでの開放空間がないことと窓がないことが気になった。たしか日本では、屋外での運動スペースや自然光を採り入れる窓がないと保育所は設置できなかったの

では・・・。

マンハッタンの中心部でオフィスに近いことから、保育料も高く、1人1カ月20万円～28万円という金額を聞いて、かなりの高給取りの家庭でないところには入れられないと思った。マンハッタン内の保育所は家賃等も高いため、企業の社内保育所がほとんどで、この施設もいくつかの企業の契約保育所になっているとのこと。多くの施設は郊外にあり、住まいの近くの施設に預ける親が多い。それは、通勤ラッシュ等による子どものストレスや通勤途上でのトラブルを回避する目的と経費的な面を考えてのこと。

ただ、印象深かったのは、ここの施設の運営に関して当たり前のこととはいえ、市が作成したカリキュラムがしっかりと実行されていることであった。例えば、〇時〇分トイレ、〇時〇分食事（どれだけ食べたか、どれだけ飲んだか）、〇時〇分～〇時〇分お昼寝など、まるで観察日誌のようなレポートがしっかり残されていた。もちろんこの中には、子どものちょっとした変化や行動等が細かく記されており、保育日誌として保存されている。

マニュアルがしっかりと確立しているため、保護者からの問い合わせや市からの問い合わせに対しても、どの指導員が対応してもすぐに子供の状況報告はできるくらい徹底した管理の下で保育されているので、保護者にとっては安心して預けることのできる施設と言えよう。そう考えれば、この場所でこのサービスは高くないのかも・・・！？

20 時 視察終了

20 時 30 分 ホテル着

2月6日（水）

7 時 10 分 ホテル発

8 時 ペンシルベニア駅発、アムトラック（鉄道）でワシントンへ移動

11 時 ワシントン、ユニオン駅到着

11 時 30 分 ワシントン D. C. 議会到着

12 時の訪問予定より早く着いたが、ブラウン議員が公聴会に出席しているため、秘

書の方の案内で公聴会に入れていただき傍聴する。



ワシントンD.C. 議会での公聴会の様子

ニューヨーク市議会と同じ雰囲気の中で、関係者がそれぞれの立場で意見を述べ、議員からの質問に答えている。

この日のテーマは、「まちづくりについて」であった。コロンバスサーカスというエリアに大型商業施設を展開しようと許可を求める投資顧問会社と思われる担当者が資料をもとに熱弁をふるっている。



公聴会中にもかかわらず再会を喜ぶ
ブラウン議員と私

12 時 15 分、クワミ・ブラウン議員面談。

忙しい公聴会の合い間を抜け出し、議会の面会室で、懇談の時間を取ってくれた。公聴会は、昼休み等関係なく続けられているとのこと。

ブラウン議員との懇談の中で印象深かったのは、様々な法律を作って企業の誘致をしても、市民が喜んでくれるのかどうかという点であった。

ワシントン D.C. 地区内では、交通渋滞が起こったりして文句を言われることも少ないとのこと。その大きな原因は、大統領府（ホワイトハウス）が近くにあることから、日常的に交通規制が敷かれ、市民生活に大きな影響を及ぼしているからだという。



ブラウン議員と都市政策について意見交換



委員会室に設けられたオフィス



委員会担当の秘書さん

大阪ではあまり意識することはないが、東京では首相官邸や皇居があるため、こんな悩みもあるのか・・・と考えさせられた。

わずか 40 分程度の懇談であったが、大阪の観光マップやガイドブックを渡すと、「大阪に行ってみよう。」と言ってくれた。日米の都市開発に関する議員連盟のようなものを立ち上げ、互いの法律の仕組みや制度のあり方について交流を深めようと意見が一致。特に、大阪駅の北ヤードの開発には興味津々で、情報を提供してほしいと依頼さ

れる。

名残惜しいが大阪での再会を約束し、彼は再び公聴会の開かれている委員会室へ戻っていった。



ブラウン議員を囲んで

13 時、クワミ・ブラウン議員秘書のイルマ・エスパルザさんの案内で議会内を見学させてもらう。

ワシントン D.C. 議会は、8 選挙区から小選挙区制で各 1 名。ワシントン D.C. 全体を選挙区とする（比例区のようなもの）ところから 5 名が選出され、13 名でワシントン D.C. 議会が構成されている（ブラウン議員は比例区の選出である）。

ニューヨーク市議会は、51 選挙区すべて小選挙区で選出された議員によって構成されていたが、州によって選挙制度が違うことも新たな発見であった。

13 名の議会というのは、委員会室等はとてもこじんまりとした印象だったが、さすがに首都の議員だけあって、20 坪以上ある自分のオフィスだけでなく、所属の委員会室にもオフィスがあり、それぞれに秘書がいて、専門的に議員をサポートする体制が整えられていることに驚いた。ニューヨーク同様、すべて公費で維持されているとのこと。

こういう環境の下でしっかりと政治活動を展開し、市民の理解を得なければ、支持されないというプレッシャーはあるようだ。特にブラウン議員の場合、比例区という選出だけに、様々なエリアの住民からの要望も多く、選挙区選出議員と意見が合わない事もしばしばあるとのこと。

14 時 20 分、ワシントン D.C. 議会の視察を終え、遅い昼食をとる。

16 時、在アメリカ日本大使館到着。

實生泰介参事官（政務班）より「大統領選について」、林幸宏参事官（経済班）より「アメリカ経済について」、それぞれブリーフィングを受ける。

また、ブリーフィングの最後には、加藤良三特命全権大使も加わり、総括的な懇談

をいただくことができた。

＜大統領選挙について＞

大統領選については、当初の予想を大きく裏切る形でクリントン候補が苦戦している背景について解説。予備選挙として投票を実施する州と、党员集会を実施する州があり、結果的に今回のスーパーチューズデーで、党员集会を開いた州はすべてオバマ候補が取った。



党员集会は、投票の秘密は守られず、会場で誰を支持するかを表明して自らの立場を明確にしなければならない。その上で、支持した候補者が15%に満たなければ、再度、態度を表明し直す15%ルールがあり、結果的にオバマ候補に票が流れた。

これは、オバマ候補を支持することで、私は人種差別をしていないというパフォーマンスにつながり、クリントン候補を支持すれば「あいつは人種差別をしている」と思われるのを嫌ってオバマ側を選択した党员も少なくない。

そういうアメリカ独特の風土の中での選挙戦で、これまでの大統領選にはなかった展開をしている。

特に党内予備選において、スーパーチューズデーで大勢が決まらないのは極めて異例で、3月4日のオハイオ、テキサスで大勢が決まらなければ前代未聞の展開となる。

過去の大統領選での大接戦の例としては、いずれも本選挙で、

1968年、保守派のニクソン(共) vs 改革派のハンフリー(民) (ニクソンが勝利)

1992年、保守派のブッシュ父(共) vs 改革派のクリントン(民) (クリントンが勝利)
の2例が代表的な接戦と言われている。

特に1992年の選挙は、2期目を目指した現職大統領が新人候補に敗れるという大波乱であったが、若い世代の声が大きくなっていることを象徴する選挙といわれた。

今回のクリントン候補の苦戦も、若い世代に対するアピールがオバマ候補の戦略として成功していると思われる。

日本に対する影響について、共和党はマケイン候補で一本化される流れとなっている。マケイン大統領となれば、日米関係にとって最良の人材と思う。副大統領にパウエル氏が就任するようなことになれば、日本にとっては大変心強い同盟国として絆を深められる。72才という高齢批判や経済面での不安を指摘する声もあるが、閣僚の人

選次第。

一方、民主党は、クリントン候補かオバマ候補に絞られた格好である。

クリントン大統領となれば、正直、日本の外交政策としては厳しいものがある。対日政策に批判的な取り巻きが多いのが日本にとって最大の不安材料となっている。ただ、ビル・クリントン元大統領の晩年は、日本に対して非常に好意的な対応をしてきていたので、ぞんざいな対応はしないと思う。

オバマ大統領についてはまったく情報がなく、彼のイデオロギーや価値観など判断できる材料がないのが不安。選挙中の言動はチェックしているが、パフォーマンスもあり、一つの課題に対する政治判断のタイミングやキーパーソンが見えてこない。

いずれにしても、このままクリントン v s オバマの接戦が長引けば、様々な遺恨を残しかねない状況にあり、結果的にはマケイン候補に有利に働くのではないかと考えている。



加藤良三 特命全権大使

<経済情勢について>

サブプライム問題が今後のアメリカ経済の浮沈のカギを握っている。住宅の着工件数がピーク時の半減となり、100 万戸を割り込む状況となっている。住宅関連企業のみならず、金融市場に与える影響も大きく、アメリカ経済の信頼度が問われている。

見通しとしては、しばらくは回復の基調が見込めず、希望的観測として 2010 年 5 月頃から好転するのではと予想されている。

ただ、大統領選の結果次第で、経済政策の大転換など政治的な期待を寄せる人も少なくない。



日本大使館前で

今年は、秋の大統領選だけでなくロシアや韓国の大統領交代をはじめ、ヨーロッパなど各国の首脳が選挙を迎える年回りで、各国のリーダーががらりと変わる可能性を秘めており、日本も例外ではない。

また、北京五輪開催年で、国際社会がどの方向に向かうのか、在米日本大使館としても注視していかなければならない。

17 時 30 分、在米日本大使館を出て、ホテルへ。

17 時 45 分、ホテル着。チェックイン。

チェックインしてシャワーでも浴びようかと着替えかけたときに、けたたましく火災報知機の音。

「ただいまこのビルで火災が発生しました。館内にいる人はすぐに退出してください。」の館内放送が流れる。そのうち止まるだろうと思っていたが、目の前の民家のような消防署から消防車がどんどん出てくるし、火災報知機の音は鳴り止まず、慌てた声で再び館内放送が流れる。「こりゃあ洒落にならんなあ」と思い、パスポートや貴重品を持ってエレベーターホールへ。しかし、エレベーターは動いていない。当然のこととはいえ、何となく焦りながら非常階段へ。非常階段も他の外国人がなにやらしゃべりながら下りていく。気のせいか焦げ臭いにおいも・・・。

路上では、宿泊客が不安そうにホテルを見上げている。しかし、消防車から放水しているような感じはしない。



ホテルの前に消防署が…



一見すると消防署には見えない建物



この扉の中に消防車が格納されている

とにかく同僚議員を探さねば！幸い正面玄関付近で皆と合流。人数を数えても数人いない。もしものことがあったらどうしようかと思いながら、「A議員とB議員はどこや？」と随行員に確認を急がせ、自分の気持ちは内心、「落ち着け！落ち着け！」と言ひ聞かす。

そうこうしているうちに「誤作動でした。」とのアナウンスがあり、ホテル内に戻る。「あ～よかった」と思いながら部屋に入るが、夕食の集合時間が迫ってくる。シャワーを浴びる間もなく用意をして、ホテルのロビーへ。

今夜は、日本大使館の石井正文公使主催の夕食会に招待されており、遅れるわけにはいきません。

18時40分、全員がロビーに集合し、ホテル出発。

ロビーで集合した際、A議員に「火災警報が鳴った時、どこに行っててん？」と聞くと、「あっ！どうせ誤作動やと思ってました。」

「団長の心、団員知らず」とはこのことか！？

19時、ワシントン市内中華料理「重慶楼」

石井正文公使、五嶋賢二公使、室田幸靖一等書記官、上野裕大一等書記官。

私は、外務省出身の石井公使、経産省出身の五嶋公使と向かい合わせに座った関係で、いろんな話をしながら会食を進める。

明日はブラジルへ移動する北米大陸最後の夜。特に五嶋公使は経済産業省出身だけ

あって、バイオエネルギーの関係の話になると、いろんなウラ話も聞かせていただいて、ブラジルでの視察の参考にさせていただこうと思った。



石井公使主催の夕食会の様子

特に興味深かったのは、資源のない日本がこれからのエネルギー政策を何に頼っていくのかという話だった。

現在の資源エネルギーは中東からの石油に依存しているが、これも未来永劫、不滅のエネルギーではないので、将来的な供給不足に対する備えは考えなければならない。

とうもろこしや、さとうきび等のバイオエタノールに関して、否定はしないものの、天候等に左右され、安定的な供給体制が整うのか？日本までの輸送費等を考えた場合に本当に国民生活にとって良い結果をもたらすのか？さらなる検討が必要である。

北海道のとうもろこしや沖縄・宮古島でのさとうきび等多少の生産は可能であっても、大半を輸入に頼らなければならない状況は変わらない。そういう意味では、国際社会の中で、原油価格が投資家によって引き上げられているのは、日本経済に良い影響を及ぼさないし、バイオを導入しても、さとうきびやとうもろこし等の先物取引相場が、原油価格のようにならないともいえない。環境問題とエネルギー問題は、これからの日本の経済政策の大きな政治課題となってくる、というものでした。

このほか、現在、ケネディセンターで開催されている「ジャパン・カルチャー」の話や、大統領選の話、日本人大リーガーの話等々、料理を食べ終わってもまだまだいろんな話をしたいなあ〜と感じるくらい「いい勉強をさせていただいた」夕食会でした。

大使館員の皆さん、遅くまでありがとうございました。そして、ごちそうさまでした。